



『世界史・日本史探究』を考える：歴史総合から世界史探究・日本史探究へ（二〇二二年度シンポジウム「『歴史探究』を考える」報告要旨）

大橋，康一

(Citation)

神戸大学史学年報, 39:12*-13*

(Issue Date)

2024-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491663>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491663>



『世界史探究・日本史探究』 を考える

―歴史総合から世界史探究・日本史
探究へ―

大橋 康一

歴史総合と探究科目について、指導要領では、歴史総合の目的は「社会的事象の歴史的な見方・考え方に基づく学習活動の充実」とされている。また両探究科目は「歴史総合で学んだ社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせる」となっており、歴史総合で学んだ歴史的概念を扱う方法、すなわち史資料を批判的に扱う方法や、歴史事象を概念的に捉える方法を、探究科目で使うことになる。

そのような教育が必要な理由として、時代の変化がある。一九八〇年代から、世界は知識経済時代に入ったと言われ、モノより、そのつくり方や利用法のほうが重要になってきている。また同時期に心理学では、人が学ぶしくみがわかってきた。これらの動きが合流し、OECD

などが知識経済への対応を始めた。その要点が、概念に基づく教育である。例えば歴史上の出来事は各時代・地域に固有だが、共通する要因をもつものもある。それを理解している人は、新しい時代に対応できる。そうした人材を意図的に作り出そうという動きが、日本でも始まったということである。

三年間のカリキュラム例については、普通科高校では、高校一年で歴史総合が必修。二年で日本史探究・世界史探究2科目を1科目か2科目選択する形が最も多い。職業高校等では、必修三科目を一・二年の間に履修する形が多い。カリキュラムの要点は「主体性」であり、国立教育政策研究所の定義によれば、自発的な学習活動の変化とされ、授業前後の生徒の学習態度を比較することになる。

高校生の学びは、ほとんど変化していないと思われる。生徒達の学習環境は、ほとんど変わっていない。生徒は学校の授業だけでなく、参考書や塾、インターネットからも学ぶ。これらがほとんど変わっておらず、高校側の準備不足もある。OECDは二十年かけて提言したが、日本は4年で説明や研修もあまりなかった。そこで、歴史系研究者や高校教員が高大連携歴史教育研究会という作業部会を作り、効果的な授業法や高大連携について研

究を始め、広めようとしている。

概念を扱う授業例として、民族移動の授業でゲルマン人移動やアメリカ移民を扱った。移民は、短期的には混乱や対立を起こすが、長期的には恩恵がある。アメリカでは移民への迫害があったが、移民出身のステイプ・ジョブスがいなければ、現代の姿は変わっただろう。二〇一五年のヨーロッパ移民危機でも、移民のメリットが理解されていれば、歴史は変わっていただろう。

そのような授業を広めるには、授業を補助する教材が必要である。そのような教材は、作成したこともあり不可能ではない。評価やテストを変えて、真の思考力を問うことも必要だろう。その手法や参考例も見つかっている。またどんなに良い授業や教材があっても、評価が変わらなければ生徒は変わらない。真の思考力がテストで評価されるようになれば、必ず生徒は学びを変えるだろう。